

宮城県文化財調査報告書第一三〇集

宮城県の民話

— 民話伝承調査報告書 —

宮城県教育委員会

として太郎どこ出す、片方の鼻がら、まだ、
フーン

と次郎のどこ出したんだど。

三人とも、今度は、うんと元気で、宝来珠山の山梨、一杯とってきて、母ちゃんさ食せだつけ、母ちゃんの病気は、すっかり良くなつたんだとさ。

どーびん。

(遠田郡小牛田町 只野とよ)

おにぎりと地藏さん

むがしあつたづあんすおや。

ある時、おじいさんが、山さ行つたづおんや。山で樵してで、ちょうど飯どぎになつたがら、

「飯食うべがなあ」

ど思つたつけ、おにぎり、コロコロコロツところがつてつて、鼠穴っこさ入つたづおんや。うだがら、

「わあ、これ、もつたいねえごどだ」

ど思つて、鼠穴っこ、一生懸命、下のほうさ行つたんだづおんや。

したつけ、そごさ、地藏さんこ、いだつたんだづおんね。地藏さんさ行つて、

「ここさおにぎり来ねがつたが」
つて聞いたつたづおんや。

「おにぎり来たけども、なんだがど思つて食つてしまつたじゃ」

つて、お地藏さん、正直に言つたんだどや。

おじいさん、

「困つたな。うんじゃ、食わねで帰るがな」

ど思つたら、

「いやいや、おれの足つこのどごさ上がつてみろや」

つて、お地藏さん言つたづおんや。うんで、おじいさん、

「とつても申しわけない。足つこなどさ上がれません」

つて言つたづおんや。

「いいがら、そつたなご言わねで上がれ」

つて言つたんだと。

「とでます、とでます」

つて言つて、足つこさ上がったづおんや。

したつけ、今度、

「おれの掌つこさ上がれ」

つて言つたづおんや。

「ああ、それは、とつてもそつたなごどできません」

つて言つたんだけども、あんまり言うもんで、掌つこさ上がったづお

んね。したら、今度、

「おれの肩かたつきさ上かみがつてみる」

つて言いつたがら、肩かたつきさ上かみがつていだづおんね。お地藏かだぐるまさんに肩車かたぐるま

したようになつたから、すつかりお地藏かだぐるまさんの格好かたがらになつたづおん。

夜よになつたつけ、そごさ山賊さんぞくだち来きつたづおんね。山賊さんぞくだち来きてがらに、火ひつこ焚たきいで博打ばちつこはじめだづおんや。

いづまでたつてもやめないし、われもおつかなくなつたがら、おじいさん、

コケコッコ

つて鳴ないだづおんや。したつけ、まだ、そつたに鳴なぐはずでもねえ時ときなのに、

「ああ、一番いちばんどり鳴ないだ」

つて山賊さんぞく言いつたづおんや。そして、

「うんで、二番にばんどりまでやつたら、帰かえねぐねえな」

つて言いつたづおんや。

（そうしているうちに）
したうちに、おじいさん、まだ、

コケコッコ

つて鳴ないだづおん。

「なんだ、こつたに早く二番にばんどり鳴ないだ。三番さんばんどり、すぐ鳴なぐじゃあ」
つて言いつて、その山賊さんぞくどもは逃にげで行いつたづおんや。

それで、今度は、山賊さんぞくの残のこしたものを取とつて、家うちさ帰かえつて来きたんだ

そしたら、隣となりの欲ほたがりが来きて、

「どうしたんだ」

つて言いうがら、

「いや、おれ、あそごんどごさいで、こうこうだ」

つてゆう話はなししたんだづおんや。

したつけ、

「うんじゃ、おれも行いつてやんねくてね。大おほきなのなら、もつと効きぎめあるべ」

ど思おもつて、大おほきなにぎりめし持もつていつて、置おいだんだづおんや。ころばねがつたづおんね。

おにぎりがころばねでうまぐねがら、ころがしたんづおん。そしたつけ、

ゴロゴロツ

と、ころがつていつたつけ、やつぱり、お地藏かだぐるまさんのどこさ行いつたづおん。

お地藏かだぐるまさんに、

「おにぎり食たつたのすか。あー、うんじゃ、おれ、乗のさるがら」
つて言いつて乗のさつたづおんね。そして、何なににも言いわねうちに、掌てのひらつさ乗のさつてしまつたづおんや。

そうしたら、やつぱり山賊さんぞくが来きて、まだ、博打ばちはじめだづおんや。

そして、

「あつちのほうから取ってきたぞ」
「こつちのほうから取ってきたぞ」

つて、たくさん並べたつおん。

欲たがりじいさま、そいづ見だらうんと欲しくなつたつおんや。う
だから、まだ、夜のはじまつたばかりなのに、

コケコッコ

つて鳴いだつおん。山賊だぢ、

「なんだ、これ。おがしいんでねえが」

と思つたつおん。昨日きのうのごどももあるが、警戒もしてだつたんだべお
ん。うんだつけ、

「おがしいね。こいづ、違ちがう」

つて言いつて、ぜんぜん動く気しねんだと。

欲たがりじいさま、早く欲しいもんだが、まだなんぼもただねうちに、

コケコッコ

つて叫こゑんだんだつおんや。

したつけ、山賊だぢ、

「なんだ、やつぱり、こいづおがしい。こつたな話ねえ」

つてゆうごどで、お地藏さんの御利益ごりやくがなくて、欲たがりじいさま、

山賊にさんざんいじめられて、帰つてきたんだつて。

どんどはれ。

(宮城郡利府町 佐々木 健)

賽さいの河原かわらの地藏じぞうさまと鬼おにだち

おおむかし、あつたどもなあ。

あつごになあ、赤鬼と青鬼と黄色い鬼といつぺえいだどもな

あ。

そうして、賽さいの河原かわらにはなあ、地藏じぞうさまいつぺえいだどもなあ。そ
のうちの一人の地藏じぞうさまなあ、いい地藏じぞうさまなんだと。

御みま仏とけさまさ、上あげんのに、だんごまるめて持つてくとこしたんだと。
ところが、ひとつのだんご、ころけてしまつたんだと。

だんごの だんごの

どこまでござる

だんごの だんごの

どこまでござる

つて、おつかげで行つたつけえ、ちやつこい穴あなさ、ぼんと入いつてたど
もなあ。ざざーととおつかげで行つたつけえ、そこに鬼おにどもいつぺえい
たんだと。鬼おにどもら、

「だんご来たど」

つて、おつかげまわして、たいへんなさわぎだつたつてよ。地藏じぞうさま
が、

「そいづは、おれのだんごだあ」

つて言つたつけえ、鬼どもは目むいて、地蔵さまとつつかまえたんだとは。

地蔵さま、とつつかまえらつて大きな籠かごさ入れらつた。鬼どもら、

「この地蔵、なんて処分したらいいがんべ」

つて、相談したんだと。鬼だちは、うんと博奕ばちすきだつたから、ひとつしかねえだんご、博奕で勝つた者がとることにしたんだと。

ところが、ながなが勝負なかなかつかなくて、だんだん時間がたつて、鬼どもが、

「夜明けつど姿見せらんねどは」

「かくれなくてね」

つつうごと言つてるわけだなれ。

地蔵さま、かんがえたんだつて。

「夜明けねうちに、はやくきめさせるには、一番ど鶏どり、二番ど鶏どりつてあるはずだ」

地蔵さまの前には、鬼どもがいつししょうけんめいぶんどつてきた金かね銀ぎん、お金かねがいろいろな宝物たからものがら、いつぺえあつたわけだつて。

それで、地蔵さま、かぶつてた笠かさとつて、

パタパタパター

コケコッコー 一の鶏どりないたー

つてやつたんだと。それでも、鬼どもはいつししょうけんめい勝負しやうぶして、きりつかん。

そんなでまた、

パタパタパター

コケコッコー

つて、二番鶏どのまねしたら、こんどあ、

「ほら、夜明けた」

つて、鬼ども逃げでつたんだつてよ。

地蔵さま、鬼ども逃げでつたあとがら、いつぺえあつた宝物たからもの、ほいづをすつかり南京袋なんきんぶくろさ入れて、しつかりど背負しよつてきて、困つた人ひとにみんなくばつてあるいたんだと。

んだがら、地蔵さまは子どもだとか困つてる人ひととか、みんな助ける役目やくめになつてつから、地蔵さまさ、だんごよけいよけいに上げることになつてんだつて。

(刈田郡七ヶ宿町 高橋批手子)

ねずみの豆まめひき

むかしむかし、ある家の庭にわのすみっこに、小さな穴あながあいでいだよ。

ばあさんは、ふしぎに思つてじいさんに話はなしたんだと。そうしたら、

じいさんは、

「毎朝まいあさ、見ていたんだけど、庭にわに穴あなはなかつたのに、いつ頃からあいのかなあ……」

と話したんだと。

じいさんとばあさんは二人ぐらしだったので、前の晩、ほうろくで豆を煎ったごどを思い出し、

「その豆を煎るたびに香ばしいにおいがしたもんで、きつとねずみが庭のすみっこさ穴あげだにちがいない」

と、ふたりでそう思ったんだと。

夕方になって、あたりが暗くなつと、じいさんとばあさんは食べ残しの豆を一升ますに入れて穴さ持つていったんだと。

豆は煎つても 一粒万倍

と言いながら、その穴に落としてやったんだと。そうすると、穴の中からころころと音がし、

ひとつぶ まんばーい

と、ねずみが豆ひく音がしたんだと。そして、

「じいさん、ばあさん、ありがとう」

という声が聞こえてきたんだと。ばあさんは、

「ねずみには、きつと食べ物がないから、毎日、豆っこ穴に落としてやっぺ」

と、じいさんに相談したんだと。

それから、夕方になると、ばあさんは穴にむかつて、

ほれほれ 一粒万倍

と言つて、穴の入口に落としてやったんだと。こうして、毎日毎日、

落どしつづけているうちに、ばあさんの家の豆も底をついで、なくなつてきたんだと。そこで、

「今晚で豆っこなくなるんで、あど、どごさが行つて、穴っこほつて、またたつしやでくらすんだと」

と言つて、最後の豆っこを穴にむかつて落どしてやったんだと。

その時、穴に入つて行く音に耳をかたむけていますと、

ころころ カチン ころころ カチン

と、金物にぶつかる音がしたんだと。

「さてさて、ねずみが金物を持っているなんてふしぎだごと」

その話をしながら、じいさんとばあさんは寝だんだと。そうしたら、真夜中に、

ひとつぶ まんばーい

という、ねずみの声がし、ヨイシヨイシヨとかけ声とともに、大きな袋をかついで、土間に運んできたんだと。

次の朝、起きでみると、見たごともねえ袋があるもんで、袋の口を開げでみると、金で作ったお金がどつきりつまつていたんだと。

これは、きつとねずみがお礼に置いていったにちがいないというごとなり、毎日そのお金を神棚にあげて拝み、ねずみがたつしやでくらししているかどうか案じだんだと。

そして、その金でまた豆を買つて、庭のすみに俵ごと置いてねずみにやり、しあわせにくらしたんだとさ。

これで、めでたしめでたし。

(黒川郡大衡村 永田公正)

屁っぴり爺じい

むがす、あつとこにねえ、仲の良いじん爺つあん婆とばん婆つあんあつたんだって。

そして、じんつあんがね、屁たれるの美しくたれる人でね、

ズイッコン ズイッコン

って屁たれながら、木挽ひいていたんだって。

そしたら、どつからきたか、白い髭ひげのおじんつあん、出はつてきてね、

「たまげておもしれ屁たれるなや、あんだの名前なんつのや」

って言ったたら、

「やまやま屁っぴり爺じいでござる」

って言ったんだって。

「んだら、屁たれてみせろ」

って言われたんだってね。

「そうすか」

ってね、たれたんだと。したつけ、ほれ、

えやつうつう

にしきごようの松原まつばら

とんぴんばらりん

とたれたんだと。

「はあ、たまげてめずらしい、いい屁だなや。もう一回、聞かせねが」
って言うので、また、

えやつうつう

にしきごようの松原まつばら

とんぴんばらりん

とたれたんだとね。

「たんまげた、何回聞いてもいいなあ。もう一回聞かせたら、宝物たからものけつから」

って言われたんだって。

そうして、また三回めたれたんだとき。

えやつうつう

にしきごようの松原まつばら

とんぴんばらりん

「とつてもいい屁聞かせられたから、んで、約束どおり、ご褒美ほうびけつから。重い方がいいが、軽い方がいいが」

って言われたんだと。んだつけ、正直じんつあんだからね、

「わたし、年とつてたなねがねながら、一番軽いのなでいがす」

って言ったんだと。

「そうやってえ、引っこんだあ」

つて言われたから、

「なんだ、おれの引っこんだの、わがったのかな」

つて、もう一回こうやって覗いてみたっけ、

「こうやってえ、出えはったあ」

つて言われたんだで、こりやてつきりわかられたと思つて、ほんとに

びっくりしてしまつて、眼、ギョロギョロつてしたっけ、

「眼は山椒の目のようだあ」

つて言われたから、

「これは困つた。もうほんとにわかられてしまつた」

と思つて、まんず、つんむりこげえして逃げて行つたんだと。

えんつこもんつこさあげえだ。

(仙台市 佐藤義子)

だんだ だんだ

むがし。

あるところで、留守中に倉がら、米ぬすまれてぬすまれてわがね

がつたと。そごで、

「おら家の倉さや、だれそれさんどこの屁つたれ嫁ごたのんでおいだ

ほういいんでねが」

となつて、まず、たのんだんだと。

したらば、夜になつて泥棒が倉さ入つたと。

嫁ごは、自分の尻さ凍み大根ねじこみすて待つてだど。

泥棒が、ほれ、米かつげつて、かつぎ出すとこすたらば、嫁つこあ、

背のびして、

だだだだだだつ、だんだ だんだ

つて、凍み大根とつげすて、たまつてた屁たれたどや。

泥棒はどでんすて、米、がらりおいてはしえで行つたどや。

(栗原郡高清水町 佐藤かね)

とんでつたきな粉

むかあーし、むかし。

あるところに、じんつあまとばんさまいたつたづもね。

そして、豆つぶひとつ、ひろつたんだと。そいつを大事にして、畑

さ豆まいたんだと。そして、実入つて豆つたから、

「こいつ、きな粉でもつくつたらよかんべ」

となつて、きな粉つくつたんだとな。

ところが、きな粉つくつたことはええけつども、じんつあま、

「なにでふるつたらえかべなあ。ふるうものがねえ」

つて言つたんだと。

ばんさまが、

「ほんだら、なにもねえから、ふんどしの片^{かた}端^{はじ}でふるつたらえかんべ」

ど、こう言^いつたんだとね。

ほんだらばつて、ふんどしでふるつたんだと。ふるつたのあええが、こんどは、

「なじよして、しまつしたらよかんべや。下さおけば猫^{ねこ}食^くんべし、戸棚^{とんぼ}さおけば鼠^{ねずみ}あ食^くんべし、どこさおいたらえかんべ」

となつたんだと。

「ほんでえ、なんとも仕様^{しやう}ねえ、おれとじんつあまのあどつぎのあいださ、おいたらえかんべ」

「ほいつあ、えかんべ」

と。

そうしたれば、夜になつて、じんつあま、屁^{へえ}たつたんだと。

屁^{へえ}たつたら、とんでつて、ばんさまのお尻^{しつぽ}さ、みなつつかかつたと。

そして、

「いたましかつたなあ」

つて、じんつあま、なめたつたどや。

豆^{まめ}粉^この 話

じんつあんとばん^{（婆）}つあんがいたんだづおんな、ほれ。

ばんつあんが、庭^{にわ}はいてたつけ、庭^{にわ}さ、豆^{まめ}つこ、ころころとつころがつてきてしや、

「いたましいからなあ」

つて、豆^{まめ}をひろつていつてしや、豆^{まめ}粉^こにこし^{こした}やいたんだとしや。

豆^{まめ}粉^こにこしやえて、

「戸棚^{とんぼ}さおくと鼠^{ねずみ}に食^かれつし、下さおくと猫^{ねこ}に食^かれつべし、じんつあんじんつあん、なじよすんべや」

つて、ばんつあんが語^{かた}つたんだとね。

「そんだらば、ばんつあん、抱^{かか}いて寝^ねべし」

つて、抱^{かか}いて寝^ねたんだとしや。

そうしたれば、じんつあんが、屁^{へえ}出^でたくなつて、屁^{へえ}、ボンツとたつたればしや、その豆^{まめ}粉^こみな散^ちらけて…。

ほしたら、ばんつあんが、い^{（もつ）}だましいとて、「じんつあんのへえのこ、うんめえなあ、うんめえなあ」

つて、なめたんだとな、ほれ。

むかしむつけて、はなしはつけて、お茶のまねね。

（加美郡宮崎町 早坂勝雄）

（加美郡宮崎町 佐々木道子）

ねずみがはこんだ豆^{まめ}

むがしむがし、おじんつあんとおばんつあんが、年とつて稼^{かせ}がれねくなつてしまった。

腹へつて、わげわがんね所^{とど}さ、ねずみが、豆^{まめ}つこ一粒、たがいてきたんだつて。

「ばんつあん、ばんつあん、こいつ、なじよして食うべ。煮て食うべか」

「豆^{まめ}粉^こつこにして食つたら、いいんでねえすか」

そうして焙^{ほろく}烙^くこで、カラコロカラコロと炒^いつて、ひきうすでココロココロと挽^ひいて、豆^{まめ}粉^こつこになつて出^ではつてきた。

その時、じんつあん、ポーンと屁^へたれて、豆^{まめ}粉^こつこ吹^ふつとんでしまつて、えんつこもんつこさげた。

(栗原郡金成町 小野寺ちゑ子)

豆^{まめ}つこばあさん

むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがあつたとき。

おばあさんが、毎朝、庭掃いてたんだげつども、ある朝、掃いてたつ

けえ、豆^{まめ}つこ一つ見つかつたんだと。

その豆^{まめ}ひろつて、焙^{ほろく}烙^くん中^{ちゆう}さいれて、カラコロン、カラコロン、豆^{まめ}いりしたんだと。いつて、豆^{まめ}粉^こにしてから、豆^{まめ}粉^こ餅^{もち}して食うんだつてしや。

おじいさんが、ほれ、

「おれさも食^くべさせろ」

つて言^いつたつけえ、

「だめだ」

つて、おばあさん食^くつたんだと。

そして、のこつた豆^{まめ}粉^こ、おじいさん見^みつからねえようにかくしたんだとしや。

「どこさかくすべな、なにさかくすべな」

つて、思案^{しあん}してたつけえ、自分のお尻^{しつぽん}さかくしたんだと。

ほしたら、夜中におばあさん、ポーンと屁^へたつたつけえ、豆^{まめ}粉^こあとんでしまつたんだと。ほんで、しかたなくて、

爺^{ぢんぢ}も なめろや

婆^{ばんば}も なめろや

つて、二人してさつばとなめてしまつたんだとしや。

こんで、えんつこもんつこさげたとしや。

(桃生郡桃生町 今野いさお)

宮城県文化財調査報告書第130集

宮 城 県 の 民 話

— 民話伝承調査報告書 —

昭和63年 3月25日印刷

昭和63年 3月31日発行

発 行 監 宮城県文化財保護協会

仙台市堤通雨宮町 4 番17号

(宮城県仙台合同庁舎)

印 刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24
